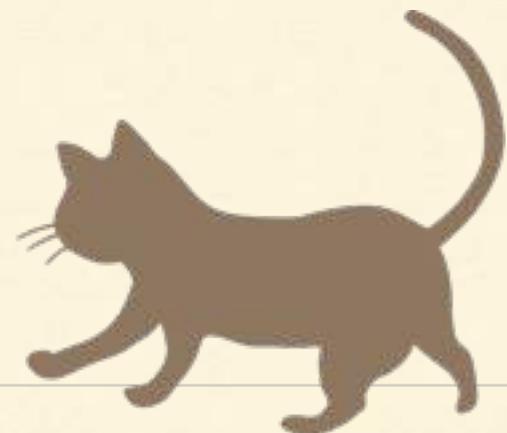


---

# ワインと癒しの旅 *in* オーストリア

---





# 1

バッハウ渓谷

ドナウ川沿いのぶどう畑

---

## バツハウ溪谷 後編



---

グルグル、グルグル。頭を撫でられて気持ちいいと思ったら、帰ってきてたのね。おかえりなさい。ふわーはっは。あら、失礼、目が覚めたらどうしても大きなあくびが出ちゃうの。それからこうやって、ふー、前足を伸ばして深呼吸。顔も洗わなくちゃ。はあ、美味しいワインを飲んだ後のお昼寝は最高ね。あなたは どうだった？ うん、そうよね、メルクの修道院はとにかく大きくて驚くわよね。図書館に続いているバルコニー？ あ、あそこね、うん、いいわね。ドナウ川も見渡せて気持ちいいのよね。楽しんできたみたいで良かったわ。

「ランちゃん、起きたみたいだね。今日はこの後どうする？」

「ヨーゼフさん、おはよう。もう夕方5時なのね。今日はヴァイセンキルヒェンに泊まることにするわ」

「了解。じゃあ、そこまで送るよ」



ここ、ちょっとしたお城みたいでかわいいでしょ。ここはね、ラッフェルズベルガーホフっていう名前のホテルで、16世紀後半の船乗りのご主人の家を改築した、ルネサンス様式のホテルなの。私そんなに建築については詳しくないけれど、ルネサンスってイタリアのフィレンツェで中世に生まれたスタイルで、古代ギリシャ、ローマ時代の復興を目指して創られた様式なんだって。そうね、フィレンツェの大聖堂なんか代表的な建築で、アーチや円柱、ドームなどが取り入れられているそうよ。ほら、あそこ見て、入り口のドアのところや、2階もアーチ状の窓枠みたいなものが出てきているでしょう。ねえ、あそこからお姫様が顔を出して、外を眺めている姿が浮かんでこない？ 中に入るとね、ほら、こういうトンネルっぽいところもルネサンス様式の特徴なんですって。階段を上って、きらびやかなお部屋に入っていきような気持ちになるじゃない。

「ランちゃん、僕の説明、よく覚えたね。でもここはお姫様が住んでいたお城じゃないからね」

「あら、セップ！ 私の話聞いてたのね。わかっているけれど、女の子はいつもこうやってキラキラするような想像をして、ワクワクすることが楽しいのよ」

「はいはい、ランお姫様」

「さっき予約をしたんだけど、お部屋はどこかしら？」



「あそこの階段を上ったところだよ。きらびやかなお部屋ではないけれど、居心地の良いお部屋だと思うよ。どうぞゆっくり」

あの黒い大きな犬は、セップっていうの。このホテルの番犬ね。でも、本当は優しくて怖がりだから、番犬の役割を果たしているかどうかはわからないんだけどね。

あら、いいじゃない。この明るい木目のフローリング、私好きよ。それから、絨毯やカーテンの赤が基調になった模様も可愛い。あ、見てみて、窓から教会が見えるわよ。ちょうどお庭も見渡せるじゃない。緑の芝生が綺麗ね。

そろそろお腹すいてきたでしょ。このホテルにはレストランがないから、町まで歩いて行って、どこかで夕食にしましょう。

ヴァイセンキルヒェンの町はとても小さいところなの。この辺りが町の中心ね。夕方だからもうお店は閉まっているわね。明日の朝、お店が開いている時間にちょっとお散歩してみるのもいいわね。

そうね、ホイリゲもいいけれど、ゆっくり落ち着いてお食事ができるところがいいわよね、ここにしましょう。

「こんばんは」

---

「いらっしゃいませ。1名様と1名様ですね。こちらへどうぞ」

ここはウアバツハウっていう名前のホテルで、レストランの名前はツェツヒハウスっていうの。13世紀の建物で、昔は商人たちの集会所として使われていて、それから司教の荘園になったんですって。90年代のはじめに、今のご主人と奥様がここを買い取って、レストランを始めて、それから後で、ホテルとしても使えるように改築したそうよ。全部セップに聞いた話なんだけどね。天井がドーム型になっていて可愛いわよね。

さて、何を食べましょうか。お昼がお魚だったから、お肉がいいかしら。

「お客様、今オススメなのは、旬のメニュー、チキンソテーのあんずソース添えですよ」

あら、いいわね、それにしましょう。ワインはどうする？ そうよね。

「ヴァイセンキルヒェンのワイン農家さんでオススメのワイン、ありますか？」

「もちろん、ありますよ。デンクさんのグリュナーフェルトリーナーもいいですし、ゲルバームスカテラーならシュネーヴァイスさんのがあります」

ゲルバームスカテラー、試してみる？

「かしこまりました。では少々お待ち下さい」

ゲルバームスカテラーは、フランス、イタリア、スペイン、ポルトガルなんかのわりと暖かいエリアで栽培されている白ワインの品種よ。オーストリアではそれほど広範囲では栽培されていないけれど、近年少しずつ増えてきているの。

「お待たせしました、どうぞ」

では、いただきます。乾杯！

そう、香りがいいわよね。でも飲んでみると辛口でしょう。この品種のぶどうは、場所によっては甘いワインにも使われているのよ。シュネーヴァイスさんって、私も行ったことがないところだわ。

「あら、お客さま、シュネーヴァイスさんはワイン農家でもあり、また陶器などの焼き物でも有名なんですよ。大通りの川沿いにありますから、ぜひのぞいてみてください」

へえ、いいことを教えてくれたわね。明日の朝、行ってみましょう。

え、可愛い建物を見たの？ ああ、牛みたいな模様って、きっとホルツアプフェルのことね。クリーム色の壁に、ピンクで水玉模様みたいな形が描かれているところでしょう。さっき、ヤメックからメルクに行く時に通ったのね。あそこもワイン農家さんで、同じようにホテルとレストランにもなっているの。そうよね、この辺りではそういうところが多いわよね。ワインも美味しいわよ。明日ヨーゼフさんにそこに寄ってもらいましょう。あそこは、この辺りで私が好きなところの一つなの。フフフ、楽しみだわ。

チキンにあんずソースがかかっているなんて、珍しいわね。うん、甘酸っぱくて美味しい。今日は美味しいものをいっぱい食べて、大満足だわ。ホテルに帰ってゆっくり寝ましょう。



大きなベッドで寝るのは気持ちいいわね。こうやってふわふわのところを踏み踏みするの、気持ちいいのよ。グルグルグルグル。スー、スー。。。。

おはよう。よく眠れたみたいね。私もホカホカのベッドで気持ちよく眠れたわ。さあ、早く顔を洗ってきてね。私もその間に毛づくろいをするわ。もうお腹すいちゃった。朝食楽しみだわ。

「おはようございます。お好きなところへお座りくださいね。朝食はビュッフェスタイルですから、あそこからご自由にお取りください」

パンにハム、チーズ、フルーツもあるわ。ジャムも美味しそう。あ、あれはゆで卵ね。卵をあの金具に入れて、お湯につけるの。砂時計で時間を計るのよ。私ひとついただくわ。

そうね、あそこのお花可愛いわよね。ねえ、階段の下にあったアヒルの置物を見た？え？ あら、そのネコの置物には気づかなかったわ。あとでちゃんと挨拶しなくちゃ。そうそう、この朝食のテーブルも可愛いわね。



「チェックアウトをお願いします」

「こちらでのご滞在はいかがでした？」

「とても素敵で、とても気に入りました。きっとまた泊まりに来ます」

「ありがとうございます。いつでもお待ちしておりますね」

ヨーゼフさんが来る前に、ちょっと町を歩きましょうか。こっちに行くと川沿いよ。朝の風が気持ちいいわね。あ、クルーズ船が来るわよ。あそこの女の子がこっちに手を振っている。私も尻尾を振ってみよう。おはよう～

たしか、川に面した大通りにあるって言ってたわよね。こっちかしら？ あ、見て、あそこ、シュネーバイスって書いてあるわね。

「こんにちは」

「いらっしゃませ。どうぞご自由にご覧下さい」



あら、かわいい雑貨がいっぱいあるじゃない。そうよね、陶器も作っているって言ってたものね。その花瓶も可愛いわね。あら、この陶製のスマラグトさん、かわいい。お土産に買って帰ろうっと。あ、ここはワインコーナーね。昨日飲んだゲルバームスカテラーもあるわよ。あら、このリースリングのゼクトのビン、ずっしりした形

がいいわ。そう、あなたはゲルバームスカテラーを買うのね。じゃあ、私はこのゼクトにするわ。

朝から良いところを見つけて、嬉しいわね。



今度はこっちを通りましょう。この辺りにもワイン農家さんが色々あるわね。本当、緑が多くて、建物がとてもステキ。あそこのお花もかわいいわね。あー、こういうところを歩くと、なんだかワクワクしちゃうのよね。ブドウ畑もいいけれど、こういう小さな町の風景もまたいいわよね。

「ヨーゼフさん、おはようございます」

「おはよう。昨日はゆっくり眠れたかい？ 今日もいい天気みたいだね」

「ええ、とてもぐっすり眠りました。今日はまず、ホルツアップフェルに行ってもらえますか？」

「了解！ あそこは今日も賑やかなんじゃないかな」

ピンクの水玉模様みたいなこの壁、オシャレよね。中に入りましょう。そうなの、ここの中庭、とってもいい感じなのよ。この中庭はレストランになっていて、プラントタワーホフって呼ばれているの。プラントタワーって言うのは、17世紀の終

わりにここを2階建てのバロック様式に改築した建築家の名前で、この人はなんと18世紀に入ってから、あの広くて美しいメルクの修道院の改築を担当することになった人なのよ。それから、息をひきとるまでずっとメルク修道院の改築に携わっていたんですって。ここの中庭でゆっくりお食事をするのもいいわよね。



「ちょうど良かった、ちょっと猫さん、こっちに来て手伝ってくれないかしら？」

「えっ？」

「早く早く、もう始まっちゃうわ。こっちよ」

えー、なんだかよくわからないけれど、私行かないといけないみたい。

「ここのウェディングドレスの裾をちょこっとくわえて、ゆっくり教会の中に入れてきてくれるかしら？」

「私が？」

「そう、あなたよ。あ、もう音楽が始まるからお願いね」

～チャーンチャーチャチャーン、チャーンチャカチャーン～

---

うわー、きれい！

「猫さん、ありがとう。助かったわ」

「ドレスが引っかかって上手く歩けなかったの。猫さんのおかげで、無事に結婚式を終えることができたわ。これからみんなでお祝いのシャンパンを頂くんだけど、猫さんも一緒に祝ってくれるかしら？」

「はい、猫さんの分。お友達の方も一緒にどうぞ」

「結婚おめでとう、乾杯！」

ねえ、私結婚式に参加しちゃったのよ、見てた？ もうドキドキしちゃったわ。大活躍だったでしょう。あら、あなたも目がウルウルしているわよ。花嫁さんきれいよね。ここにこんな可愛いチャペルがあったなんて、知らなかったわ。ここで結婚式を挙げられるなんて、幸せねえ。

「おや、ランちゃんじゃないか。ランちゃんも結婚式に呼ばれていたんだね」

「おじさん、お久しぶりです。呼ばれていたわけじゃないんだけど、ここに来たら、花嫁さんのお手伝いをする事になっちゃって。ここでは、こんなにステキな結婚式までできるんですね」

「今の時期から夏の終わりまで、週末は特にほとんど結婚式の予約が入っているんだよ。今日はこれから中庭でランチパーティーなんだ。ランちゃんたちも一緒にどうだい？」

「ありがとうございます。ここの中庭でランチパーティーなんてすごく魅力的だけれど、今日は私たち、ちょっとワインを買いに来ただけだから」

「ああ、そうだったんだ。えっと、じゃあすぐに行くからあっちのショップで待っててくれるかな？」

なんだか忙しそうね。先にショップを見てみましょう。

クッキーも美味しそうね。あら、これトマトのジャムですって。面白いわね。



ああ、そのワインの瓶に書かれているのは、だいたい畑の名前よ。それぞれの畑で採れたブドウから造られたワインが、そのままそのワインの名前になっているのよね。畑の場所、土の成分によって、味も変わってくるからどこの畑かっていうことも、大切なのね。

「お待たせ。どれか飲んでみる？ このフォアデルサイバーで採れたリースリングのスマラグトなんかどう？」

「はい、じゃあいただきます」

辛口なのに桃のような甘い香り。美味しい。

あら、いいじゃない、美味しそう。それじゃあこのワイン2本と、このトマトのジャムお願いします。

「ランちゃんとお友達の方、ありがとう。また来てね」

---

「ヨーゼフさん、お待たせしました。突然結婚式に出ることになっちゃって」

「それはさぞかし楽しかっただろうね。それじゃあ、またデュルンシュタインに向かって出発するよ」

「はい、ヨーゼフさん、お願いします」

なんかワインいっぱい買っちゃたわね。でもせっかく美味しいワインを作っているところに来たんだから、楽しまなくちゃね。何しろ、この辺りでは、幽閉されていたイギリスの王様だって、ワインをたくさん飲んでいたって言われているんだものね。あ、そうよね、私リチャード獅子心王の話、途中でやめたんだったわね。

12世紀の終わり、イギリスの王様リチャード1世は、十字軍の帰りに船が遭難して、オーストリアで捕虜となってしまったの。運悪く、リチャードは十字軍遠征でオーストリアのレオポルト5世と一緒に戦って手柄を上げた時に、レオポルト5世を怒らせるようなことをしてしまったのよね。だからその時の恨みもあって、そのまま幽閉されてしまったの。歴史的には、その後イギリスが多額の身代金を払って、王様は解放されたわけなんだけど、オーストリアではそのことにまつわる言い伝えが残されているのよ。ねえ、イギリス側はどうやってリチャード王がこのデュルンシュタインに捕らえられているって知ったと思う？ 多くの方は、彼はもう戻らないんじゃないかって思っていたようなんだけど、もしかしたらレオポルト5世の怒りを買ったこともあって、ドイツかオーストリアで囚われの身になっているかもしれないって考えた忠実な家臣がいたの。そこで、吟遊詩人のブロンデルが、ドイツやオーストリアの山々を、王様が好きだった詩を歌いながら歩き回ったの。すると、ついにブロンデルが歌った詩に、なんとリチャード王が応えたのよ。それでリチャード王はまだ生きていて、ここに囚われているんだっていうことがわかったんですって。それから、身代金を支払って、解放してもらえたっていうお話。デュルンシュタインには、この王様がライオンのような強靱なハートを持つリチャード獅子心王と呼ばれていたことか

ら、リチャード獅子心王（リヒャルトレーベンヘルツ）っていう名前のホテルもあるし、吟遊詩人ブロンデルっていう名前のホテルもあるのよ。ちょっとメルヘンの世界を感じられて、可愛いじゃない？

それから、さっきも言ったけれど、実際王様は囚われていた間も、毎日美味しいワインをいっぱい飲んでいたっていうお話もあるのよ。



「さあ、着いたよ」

「ヨーゼフさん、ありがとう。じゃあちょっと行ってくるわね」

さて、ここは私たちがこのバッハウエリアで訪れる、最後のワイン農家よ。ドメーネバッハウっていうの。なんだかモダンでカッコいい建物でしょう。ここはこれまでと違って、家族経営の小さなワイン農家ではないの。バッハウエリアのドナウ川沿い両岸に広く畑を持っている、ワイン製造会社のようなところ。中に入りましょう。

たくさんのワインが並んでいるでしょう。



「こんにちは。何かお探しのワインでもありますか？」

「こんにちは。特にこれが、というものはないんですけど、たくさんあって迷いますね」

「こちらは畑の場所によって分かれていますよ。ここはデュルンシュタインの畑でできたワイン。ちょうどこの外にも畑があります。それからこちらが急斜面で育ったブドウ、こちらが石段のテラスで育ったブドウ。それぞれに特徴があるんですよ。あら、お客様、こちらのワインに目をつけられたんですね」

あら、カツェンスプルングね。猫の絵に惹かれたのね。

「こちらはグリューナーフェルトリーナーのシュタインフェダーで、デュルンシュタインの畑で作られているんですよ。やわらかくて軽い口当たりのワインなんです。どうぞ飲んでみてください。今用意しますね」

カツェはドイツ語で猫、スプルングはジャンプ。つまり、猫のジャンプね。ラベルの猫さんもジャンプしている感じでしょう。

「どうぞ」

「ありがとうございます。いただきます」

「なんだか本当に軽くて優しいんだけど、でもちゃんと辛口の酸味も効いていて、とても飲みやすいワインね」

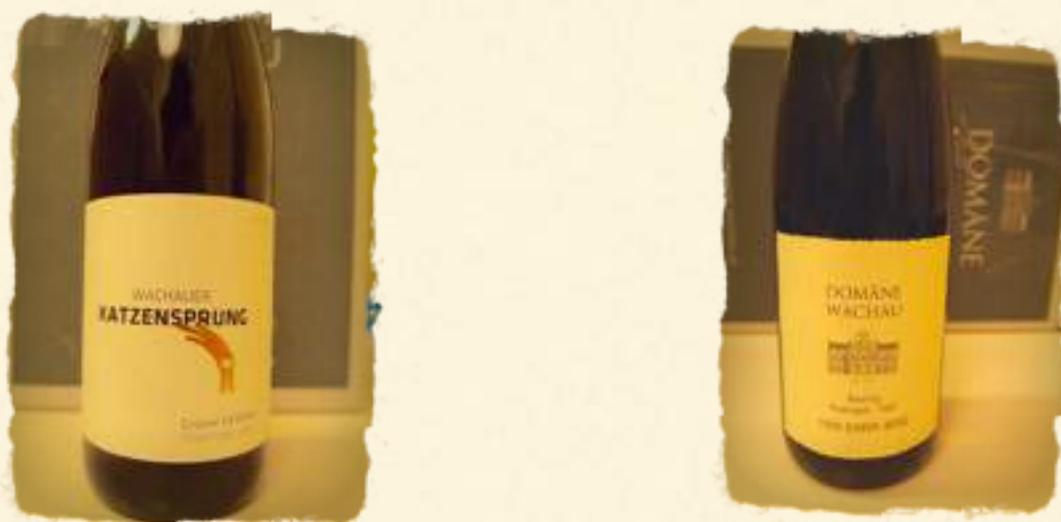
「あら、猫さま、さすがです。このワインは、口当たりが軽いけれど、どこか一筋縄ではいかないような、抜け目のない酸味が効いているんです。まるで猫のジャンプのようにね」

へえ、それでカッツェンスプルングなのね。

うん、そうね、私も欲しいわ。

「じゃあ、このワイン、2本、いえ3本お願いします」

「かしこまりました。他にはよろしいですか？」



「ええと、リースリングのお勧めはどちらになりますか？」

「リースリングはこちらの棚です。先ほどのデュルンシュタインの畑ですので、こちらの1000アイマーベルグのフェダーシュピールなんてどうですか？ シュピーツの斜面で作られたブドウです」

あ、いいわね。1000のバケツの丘陵地っていう名前がついているわ。

「ではこれも3本お願いします」

---

「ありがとうございます」

シュピーツはバケツ1000杯分のワインが取れるブドウ畑とも言われているのよ。あ、そうね、私一度言ったわね、よく覚えてたわね。

「はい、ではこちらになります。重いですから気をつけてくださいね。ありがとうございました」

車の中にワインを置いて、ちょっと畑の方まで歩いてみましょうか。

カツェンスプルングは、この辺りの畑で作られたブドウからできているのかしらね。

えっ？ 本当？ 猫がいた？ 私わからなかったけれど。えっ？ あそこ？ あ、本当だ、ジャンプして畑の方に行ったわね。私見てくる。

「こんにちは。ミヤー」

「あら、あなたは？」

「私はラン。今ここでワインを買ったところなのよ」

「あらそうなの。じゃあ、もちろんカツェンスプルングを買ったかしら？ カツェンスプルングは、私のご先祖さんがモデルになっているのよ」

「え、そうだったの？」

「そうだ、あのお城はもう見たかしら？ まだだったら案内するわよ」

「お城？ まだ見てないわ。ぜひお願いします。こちらは私のお友達よ」

「こんにちは。私はリリーよ。よろしくね」

リリーのご先祖さんが、カッツェンスプルングのモデルになったんですって。そう言われると、さっきのジャンプの感じ、あのラベルの絵と似てたわね。

「線路を渡るから、気をつけてね」



あそこがデュルンシュタインの駅。ここにはウィーンから列車でもこれるのよ。クレムスでローカル列車に乗り換えるの。列車の旅もまたいいわよね。

「ほら、あそこ」

「あら、可愛い、黄色いお城があるわ！」

「ここはね、18世紀にバロック様式で建てられたの。もともと、バッハウワインの試飲を楽しめるところとして使われていたんですって。有名人もたくさん訪れているそうよ。それから改築されて、2006年にまた、壁の絵画やフレスコなど見事にバロック時代を再現して、たくさんの人たちにまたバッハウのブドウ畑の景色を楽しんでもらえるようにしたのよ」

すごい、周りがブドウ畑で囲まれているし、ちょうどブドウ畑の斜面の下にあるわよ。なんだかおとぎの世界に迷い込んできたみたいな感じがするじゃない。



「ここでは、イベントやセミナーも開かれるし、プライベートで家族や会社のパーティー会場として借りることもできるのよ。私たち猫仲間は、クリスマスにここのお部屋を借りて猫パーティーを開くのよ」

「あら、楽しそうね」

「ランちゃんも今度のクリスマスには是非いらして。毎年猫サンタさんからのプレゼントもあるんだから」

とっても楽しみだわ。おしゃれして行かなくちゃ。

「それから、ここはワインの貯蔵庫にもなっているの。内部のガイドツアーもあって、ワインの試飲もできるようになっているのよ。今日は中をお見せできないのが残念なんだけれど」

へえ、ワインもいっぱいあるっていうことね。こんな中世のお城のようなところでワインを飲みながらパーティーができるなんて、やっぱりデュルンシュタインは可愛いメルヘンの世界があふれているのね。ステキ。

「あそこのテラスの階段、ちょっと上がってみましょう。窓からちょっと中をのぞいてみて」

---

うーん、暗くてよくわからないけれど、なんだか立派な絵が描かれているようね。  
あ、見て、ここからデュルンシュタインの城跡も、ドナウ川も見渡せるわよ。まさに  
バッハウ渓谷に建てられたお城ね。

「リリー、ステキなところへ案内してくれてありがとう。あなたもワインは好きなの？」

「もちろん。このあたりで暮らしているのに、ワインを飲まないなんてもったいないわ」

「フフフ、そうよね。もし良かったら、今度ウィーンのワインも紹介するから是非遊びに来てね」

え、そうよ、バッハウ渓谷のワインの旅はこれでおしまいよ。美味しいワインをいっぱい飲んで、たくさんお土産も買って、楽しかったわね。あら、名残惜しそうな顔をしているわね。大丈夫よ、今度またすぐ、次のワインの旅に出かけましょう。楽しみにしててね。

「ヨーゼフさん、ただいま。これでバッハウのワインの旅はおしまいです。ウィーンに帰りましょう。はい、これヨーゼフさんにお土産」

「おや、ランちゃん、いつもありがとう。今回はドメーネバッハウだね。家に帰って夕食と一緒に美味しくいただくよ。楽しみだなあ。あ、ランちゃんもう寝ちゃってる。ウィーンに着くまで、おやすみなさい」

